

一般演題抄録

I-3 切除不能胃癌における Nivolumab 療法の成績と予後予測因子の検討

○斎藤 純介¹ 棟方 正樹² 陳 豊¹ 蓮井 研悟¹ 佐藤 温¹

(弘前大学大学院医学研究科 腫瘍内科学講座¹、青森県立中央病院
消化器内科²)

【目的】Nivolumab (Nivo) は切除不能再発胃癌に対し3次治療以降の標準治療となっている。Nivo 投与により免疫の活性化を引き起こし自己免疫疾患様症状（免疫関連有害事象：irAEs）が出現することがある。実臨床で Nivo 投与をおこなった切除不能進行胃癌の治療成績について生存期間、治療制御率について解析を行った。

【対象】青森県立中央病院消化器内科で Nivo 投与が行われた 63 例を対象とし、無増悪生存期間（PFS）、全生存期間（OS）、irAEs の発症の有無について解析を行った。【結果】対象全 63 例の無増悪生存期間は PFS、OS はそれぞれ 1.67 カ月（95%CI 1.32-1.97 カ月）、7.00 カ月（95%CI 4.14-9.82 カ月）であった。病勢制御率は 19/61 (31.1%) であった。ステロイド製剤投与を必要とした irAEs 発症率は 9/63 例 (14.3%) であり、irAEs 発症に伴う死亡例は出現しなかった。irAEs 発症の 5/9 例 (55.6%) は irAEs 発症後にステロイド製剤を投与することで irAEs を制御することができとなり、Nivo 再投与を行うことができた。irAEs 発症の有無における PFS、OS の差について一般化 Wilcoxon 検定にて解析を行った。PFS : irAEs(+) vs irAEs (-) 161 日 vs 41 日 ($p=0.0072$)、OS : irAEs(+) vs irAEs (-) 691 日 vs 141 日 ($p=0.0349$) と PFS、OS 共に irAEs(+)群が有意差をもって良好な成績を示した。病勢制御率についても irAE (+) 群は 8/9 (88.9%) であるのに対し、irAE (-) 群は 11/52 (21.2%) と差が認められた。【結論】irAEs 発症の有無が胃癌に対する Nivo 治療成績と関連していると考えられた。irAEs 発症時にはステロイド製剤投与を含めた適切な治療を行い、可能な限り Nivo 再投与を試みることが長期生存に寄与する可能性がある。